

国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所 岡本敦 大野克典 正木貴文
NPO 法人砂防広報センター 反町雄二 ○宇田川和俊

1. はじめに

近年の異常気象による局地的な豪雨等により、全国各地で土砂災害が発生している。土砂災害はいつ、どこで発生するかわからないため、早めの警戒避難を実現することが重要である。そのため、これまでも様々な防災意識啓発の取り組みが行われてきた。しかしながら、土砂災害は自分たちの暮らしとは無縁だと思っている（＝興味がない）住民が多く、土砂災害に対する防災意識を高めていくことが急務とされている。

そこで、土砂災害に興味をいだかせる新しい取り組みとして、様々な体験を通じて地域を学ぶエクスカージョンによる啓発活動を検討し、試行した。その結果について報告する。

2. エクスカージョンを活用した防災意識啓発

2.1. エクスカージョンとは

ここで言う「エクスカージョン」とは、実際に現地を目で見ながら、案内人による説明を耳で聞き、地域の人々とふれあい、地域の食を味わう、といった五感を使った体験を通して、参加者が質問や意見を交わしながら、地域の自然や歴史、文化など様々な事柄について、理解を深めていく「体験型の学習活動」のことである。

2.2. エクスカージョンを活用した防災意識啓発のポイント

防災意識啓発の対象となる住民は、直接的に土砂災害の被害に遭う危険性のある中山間地域の住民（以下：地域住民）と山間部からの土砂流出に起因して発生する洪水等の被害が想定される河川の下流域の住民（以下：下流域住民）に分けることができる。それぞれについて、エクスカージョンを活用した土砂災害への理解を深める防災意識啓発のポイントを整理した。

【地域住民】エクスカージョンを行う場所が、普段から見慣れている住みなれた地域であるため、「新たな気づき」や「驚き」を与え、地域を再発見することで、地域を知る延長として防災意識を高めることができる。ポイントを以下に示す。

- ・ 様々な視点や切り口（自然科学・歴史・文化）から見慣れている地域と土砂災害や砂防事業との関係について説明し、知的好奇心を呼び起こす。
- ・ 「食」などを交えた五感に訴える体験と結びつけ、印象に残るよう演出する。

【下流域住民】上流域に訪れる目的は観光が主であること、また、自分たちの暮らしと上流域とのつながりを知らないことから、観光的要素を取り入れることで参加意欲を促し、上流と下流のつながりを気づかせることで、上流域の問題を「自分の問題」として捉え、防災意識を高めることができる。その際のポイントを以下に示す。

- ・ 観光的要素や地域の独自性を取り入れ、魅力あるコースとし、土砂災害に興味を持たない人の参加を促す。
- ・ 地域の住民とふれあいや、五感に訴える体験と結びつけ、印象に残るよう演出する。
- ・ 様々な視点や切り口（自然科学・歴史・文化）から生活の場からは離れ、あまり知らなかった地域と土砂災害や砂防事業との関係について説明し、知的好奇心を呼び起こす。
- ・ 河川の上流で行われている砂防事業が、下流域で営まれている生活を守っていることなど、下流域と上流域の人々の暮らしのつながりを知ることで、上流で発生する土砂災害を身近な問題として意識させる。

3. エクスカージョンを活用した防災意識啓発の事例

実際の試行例として、平成18年11月24日に「繰り返された災害とそれを防ぐ努力」をテーマに開催した木曾谷エクスカージョンを紹介する。対象は地域住民とし、参加者は将来的にエクスカージョンの推進役となる木曾谷の町村役場、観光協会や観光ボランティアの方20名である。

3.1. 見学箇所の概要

実施したエクスカージョンの、主な見学箇所の概要を以下に示す。

【伊勢小屋沢】昭和28年に大規模な蛇抜け（土石流）が発生した木曾川の支流（小溪流）で、土石流により流されてきた巨石や災害の教訓が刻まれた慰霊碑が残る。また、木曾川の対岸からは伊勢小屋沢の全景を一望することができる。

【岩石公園】木曾川の中州にある巨石が点在する河原で、木曾川の流れによって運ばれた木曾谷の様々な種類の石を実際に見ることができる。

【中山道（一石橋～大崖）】中山道は江戸時代に徳川幕府が管理した重要な五街道の1つで、このうち、費川宿～馬籠宿にかけては木曾路と呼ばれ、当時の面影を残す宿場や街道が残っている。現在では、観光地としてウォーキング等を楽しむ人が多数訪れている。中山道（一石橋～大崖）には、知られざる土砂災害の歴史が数多く残っている。

【大崖砂防公園】大崖砂防堰堤は、明治13年頃につくられた長野県で最も古い石積堰堤とされている。明治13年6月、堰堤の工事現場に明治天皇が巡幸途中に立ち寄られたとの記録が残っている。また、同年8月にオランダ人技師 デ・レーケが訪れ、工事現場で種々の工法を指示したとされている。昭和57年に約100年ぶりに発見され、木曾川治水100周年事業の一環として、昭和62年に石積堰堤の一部が掘り起こされ、砂防公園として整備された。

3.2. エクスカーションを活用した防災意識啓発の試行

試行したエクスカーションでは、地元の郷土史家と自然研究家を講師として、前述の見学箇所を巡った。災害の歴史やそれに携った人々のドラマ、災害が多い理由（歴史、地形・地質といった視点）等から南木曾町の蛇抜けとよばれる土砂災害について説明し、参加者の知的好奇心を呼び起こし、土砂災害に対する理解を深めることに努めた。

エクスカーション試行後、参加者にアンケート調査を行った。アンケート結果は図1のとおりである。

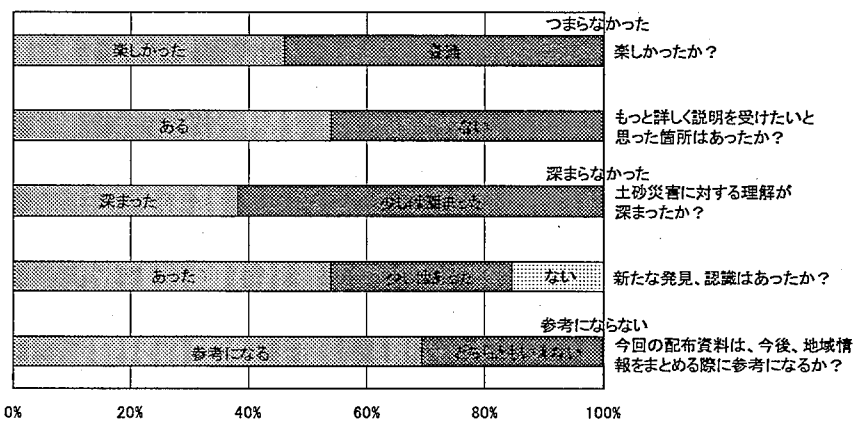


図1 アンケート結果

これによると、土砂災害に特化したコースでも楽しむことができ、知的好奇心を呼び起こし土砂災害への理解を深めたことがわかった。また、参加いただいた観光関係の方から見ても、災害の歴史や地形・地質等の説明によって、新たな発見と認識があり、配付資料も地域情報をまとめる参考となるなどの結果が得られた。

3.3. 考察

前述の事例とアンケート結果から次のような見解が得られた。

- ・ 観光コースとして紹介することで、防災に興味のない住民を対象としても集客が可能である。
- ・ 地域の名所等を説明する中で、知らず知らずに防災意識啓発を行うことが可能である。
- ・ 実際に現場を見せ、専門家によりその土地の自然科学・歴史・文化を説明することで、参加者の知的好奇心を呼び起こし興味をより深めることができる。
- ・ 地域住民にとっては、地域を「客観的な目」で見直す契機となり、地域の魅力を再発見することができる。
- ・ テキスト作成の過程においては、これまで埋もれていた土砂災害に関する文献やその地域の土砂災害の歴史、災害遺構、地形・地質等の地域情報の収集や整理を行うことができる。

以上から、防災意識が低い住民への啓発活動として、エクスカーションが有効であると考えられる。

4. おわりに

今回試行した事例は、町村役場や観光協会等のエクスカーションの受け入れ側となる人を対象としたものであるが、エクスカーションを活用した防災意識啓発の有効性を確認することができた。今後はこの事例をもとに、参加いただいた地域住民と協働で、魅力あふれるコースや内容を検討し、地域の一般住民、さらには、木曾川下流域の一般住民を対象としたエクスカーションを実施することで、少しでも多くの人に土砂災害や砂防事業への理解を深めていきたい。

地域の防災